

スリランカ国際ワークショップ「家族強化：ソーシャルワーカーの役割」参加報告書

報告者：JFSW 国際委員長 木村真理子
JFSW 国際委員会委員 平田美智子

2020年1月20日から22日までの3日間、スリランカ、コロンボ市内 Janaki Hotel の会議室で、国際ワークショップが開催されました。参加者は、スリランカのソーシャルワーカー（公務員、NGO等）、行政職員、研究者など約80名でした。このワークショップは、スリランカソーシャルワーカー専門職協会(Sri Lanka Association of Professional Social Workers, SLAPSW と略)と日本ソーシャルワーカー連盟 (Japanese Federation of Social Workers, JFSW) の共催で、スリランカ側は社会開発庁の技術的支援を受けており、日本側は財団法人社会福祉振興・試験センターの助成金を受けての開催でした。ワークショップの開催に至るまでは、日本の JFSW 国際委員の働きかけが強く、2019年のインドでの IFSWAP 会議でスリランカのソーシャルワーカー、研究者と JFSW 委員長等が話し合い、プログラムを練って開催に至りました。以下、ワークショップの概要をまとめました。

1月20日(月) ワークショップ1日目

9:10-10:00 開会式

来賓として、スリランカ社会安全局大臣 Balasuriya 氏、JFSW 木村真理子と平田美智子他が招かれ、それぞれ簡単な挨拶をしました。近代化が進むにつれ、スリランカの社会は以前の拡大家族から核家族へ変化し、人々の考え方も個人主義が強くなってきており、子どもの安全や保護、老人の介護などの社会課題を解決すべく、ソーシャルワーカーの役割が注目されるようになったということでした。そこで、ソーシャルワーカーの役割について、ワークショップで議論を深めていこうということになりました。

10:30-11:00 講義「スリランカの家族の変容」(コロンボ大学 Indralal De Silva 名誉教授)

スリランカ社会は、少子化・高齢化・核家族化・移住(国内も含め)・移民が進み、個人主義が強くなり、一人世帯も増え、子どものインターネット使用などで家庭環境は変化しつつあります。スリランカ社会はオランダやイギリスの植民地だった影響で、男性優位・暴力(D.V.)の文化があり、家族の崩壊(失踪・離別・離婚)が見られ、家族の絆が弱まっているとのことでした。こうした変化に抗して、家族に絆を強めるべきだということですが、具体的な提案はありませんでした。

13:30-14:00 講義「スリランカの家族強化の家族政策」(UNU, Karunathilaka 教授)

スリランカ政府は、憲法でも謳われているように、家族を基盤にした国民の生活、福祉の向上に努めてきており、家族による子どもの世話と家族の絆を強める家族政策を推進してきました。社会問題としては、移民（都市へも含め）、教育偏重（経済的負担）、子どもの虐待、単身家族（母子家族）、障がい児や障がいの家族、が挙げられており、こうした課題に対応するにも個々の家族が団結する必要があると、家族強化を柱とすべき政策提言がありました。しかしながら、家族に代わる里親養育や地域のボランティアによる支援などの提言はなく、もう一步踏み込んだ政策が必要かと感じました。

11:30-12:30 グループワーク（ディスカッションと発表）

午後

2:00-2:30 講義「危機にあるあるいは代替的ケアを必要とする子ども：ソーシャルワーク実践の示唆」 Pamela Pieris 氏（ソーシャルワークコンサルタント）

子どもは原則家族の下で育つべきであるが、移民・難民・親の移住労働などで親と一緒に住めない子どももいます。また、虐待などを受け、親に保護されるのが適切でない場合があります。どんな場合も、子どもの代替ケアには原則があり、それは、親に代わる者としては、親類などのインフォーマルケアが最優先されることです。次に、里親養護など家庭や家庭的環境が望ましいとされます。しかしながら、スリランカには里親養護の制度がないので、課題となると思いました。

3:00-5:00 グループワーク（ディスカッションと発表）

1月21日（火）ワークショップ2日目

9:00-9:30 講義「子どものケアと保護におけるソーシャルワーカーの役割」 Tatparan Jeganadan（児童保護コンサルタント）

家族が離婚の増加などで、以前のように機能しなくなっており、子どものケアに関しても保育の専門職などの養成が必要です。家庭で養育されない子どもは、児童保護の専門家によりNGOの施設などに保護され、DVのケースなどでは、母子で保護されることもあります。児童保護の制度は、国の制度としてはまだ十分確立されておらず、ソーシャルワーカーの養成も必要であるとのことでした。

9:30-10:00 講義「日本の地域での子育て支援サービスについて」 JFSW 平田 美智子

日本では、少子化・核家族化・都市化などを背景に、子育て中でも働く女性が増え、男性の家事・育児参加が望めない中、「ワンオペ育児」、実家などから離れて育児する「アウェイ育児」が子育て中の親（特に母親）にストレスとなり、児童虐待につながる例もあります。これに対応する社会福祉サービスとして、親へのグループワーク、ひろば事業、家庭訪問事

業、ファミリーサポートセンター事業などが有効です。また、児童虐待を受け保護を要する子どもは、里親家庭に優先的に委託されるように努力しており、里親や、ボランティアの開拓に力を入れていると報告しました。ボランティア活動の一つとして、「子ども食堂」の紹介もしました。

10:30-12:30 グループワーク（ディスカッションと発表）

午後

講義「スリランカの女性家事労働移住者」社会開発コンサルタント Ms.Prema Gamage

講義予定でしたが、通訳の問題があり資料のみでの発表でした。スリランカから中東などに家事労働者として出稼ぎに出る女性が増え、虐待や人権侵害に遭ったり、国内に残された家族にも影響が出ていることなどの報告がある予定でした。

13:30-14:00 講義「変化する家族に働きかけるソーシャルワーカー」SLAPSW 会長 Mr. Ranaweera

14:00-15:00 グループワーク

15:30-16:00 閉会式・修了書授与

1月23日（水）施設見学（外国人参加者のみ）

午前：「SOS子どもの村」

世界各国にあるNGOで、要保護児童を10人くらいの単位の小舎制でマザーという寮母が世話する施設。マザーに直接会い、身寄りのない退職したマザーたちのホームも見学しました。子どもたちの養育が困難な場合、ソーシャルワーカーや男性職員がバックアップしてくれるとマザーが話していました。

午後：「Serve:地域の女性・子どものエンパワメント機関」

地域の貧困地域の中にあるコミュニティ・センターを拠点に、女性グループ、児童のグループ等を対象にグループワークを実践しています。元々、スクールソーシャルワーカーが中心になって始めた活動ですが、子どものみでなく母親や地域の住民にまで対象を広げていったそうです。見学したときは、子どもの補習（コンピューター）、ストリート劇（DV撲滅）の練習、女性の起業（ローン）支援、子どもたちのグループワーク（自信を持つためのワーク）を行っていました。

この他、ワークショップの実行委員や参加者のご厚意で、児童養護施設、療育施設を見学させていただきました。両施設とも日本からの財政的・技術的支援を受けており、日本とスリランカの友好関係を実感する訪問となりました。

1月23日（木）JFSW が災害支援をした小学校訪問（木村）

JFSW と SLAPSW 連携による災害支援プロジェクト：水害で被害に遭ったラトゥナブラ地域の小学校への図書寄贈

2017年5月、スリランカは70年ぶりの大災害を経験しました。コロンボから数十キロ離れたラトゥナブラ地域が被災度合いが最も深刻で、25行政区のうちの15地域という広域が水害に襲われ、被災者は60万人、死者は220人に上り、行方不明者は100人に上りました。小学校も被災し、建物や教材が多く被害を受けました。社会サービス省は、スリランカソーシャルワーカー協会を通じて、日本ソーシャルワーカー連盟に、募金の要請があったため、募金をして送金を行いました。この募金は、社会サービス省を通じて、被災地のいくつかの小学校に図書として送られました。今回スリランカ訪問にあたり、ラトゥナブラ地域の小学校訪問の希望を伝え実現しました。スリランカでは、復旧に当たっては、浸水した建物の復旧、パソコンなど学習機材の寄付を募って再建、図書館の整備を行いました。教材はとても重要で、8月に全国学力テストがあり、進路決定に重要な意味を持つものであり、財政的支援は大きな意味を持つとのこと、小学校の生徒に対する学力維持が大変重要課題であることがわかりました。訪問に際して、学校は全校あげて、歓迎をしていただき、文化交流行事として、生徒が午前中の2時間を割いて、歓迎の舞踊を数種類披露してくださいました。学力テストでも、良好な成績を収め、進学や学習意欲が高い結果を示していることが、好調であると、校長のインディカ・ペレイラ先生から報告がありました。スリランカソーシャルワーカー協会も、事務局長と運営委員会メンバーを含め、総勢6名が参加して訪問をしました。歓迎ぶりは、添付の写真をご参照いただければと思います。山間地域で、通常都会とは異なり、人の往来も限られた地域の学校であるだけに、こうした訪問は、生徒にとっても刺激となったようでした。

ワークショップを終えての感想：

スリランカのソーシャルワーカー協会はかつて IFSW 世界大会を開催したこともあり、国際ワークショップ開催には意欲的でした。JFSW は、中国の IFAP 会議で SLAPSW の役員で社会福祉局に勤務する Jayantha Premale 氏と相談し、ワークショップ開催の準備を進めてきました。2019年の日本の石巻でのワークショップにはスリランカの若手ソーシャルワーカーである Yasintha 氏を招き、ワークショップ開催の時に活躍してもらうことを確認しました。そうした、人的交流が実を結び、今回のワークショップでは、両氏が運営の実務

的な役割を担ってくれ、大いに助かりました。

ワークショップのテーマ「家族強化：ソーシャルワーカーの役割」は、スリランカの SLAPSW の実行委員が協議し決めたものですが、核家族・都市化が進むスリランカ社会の模索をどうソーシャルワーカーが支援するかという、アジア各国共通のテーマでした。そういう意味では、「無縁社会」化がやや先を行く日本社会の取り組みは多少とも参考になったと思います。グループワークの議論では、ソーシャルワーカーの地位が曖昧である、社会に認知されていない、認知されるためには資格化を検討する必要がある、とアジアの他の国に共通の話題が多く出されました。日本の国家資格や国家試験にも関心を持っているようでしたが、ソーシャルワーカーの登録制を進めることで動き出すようでした。

今回のワークショップには、カンボジアから 2 人（NGO 関係に勤務の 20 歳代のソーシャルワーカー）、日本から 2 人（病院と児童発達支援センター勤務のソーシャルワーカー）の若手ソーシャルワーカーが参加しました。カンボジアのワーカーの一人は、カンボジア・ソーシャルワーカー協会の副会長で、英語の堪能な彼女は意欲的にスリランカのソーシャルワーカーと交流し、近い将来、カンボジアでもワークショップを開催したいと意欲を示していました。日本からのソーシャルワーカー 2 人も、大変熱心に学び、スリランカのソーシャルワーカーや地元の子どもたちともすぐ打ち解け、スリランカとの交流に一役買ったと思われます。何よりも、スリランカ、カンボジア、日本とアジア各国の若いソーシャルワーカー達が言葉や文化の壁を乗り越え、交流できたことは、未来のアジアのソーシャルワーカーのネットワーク作りに役立ったことと確信します。 (以上)